

若者へのHIV・AIDS・薬物・インターネット依存・ゲーム依存などに関する啓発活動

静岡英和学院大学 人間社会学部

日本語学研究室 市原ゼミ

指導教員：専任講師 市原乃奈

参加学生：阿部瞳 池田嵐 植田春樹 大澤佳起 野上裕博

法月敦星 原叶依 牧野正和 溝口夏奈子

協力学生：阿部有沙 上野晃大 杉山七海 清将輝 野田智恵美

PATRICIA KHOR WUAN YI 藤田賢人 藤田桃子

1. 要約

当ゼミでは、2018年より静岡市「しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業」の助成を受け、「若者へのエイズ啓発およびHIV検査の周知」について検討し、さまざまな媒体を通じて啓発活動を行ってきた。今年度は、「中高生へのエイズ予防・啓発」について取り上げ活動を継続している。さらに、今年度は、ふじのくにコンソーシアム「ゼミ学生等地域貢献推進事業」の助成を受け、「若者へのHIV・AIDS・薬物・インターネット依存・ゲーム依存などに関する啓発活動」にも力を注いできた。

両団体からの助成を受けた活動には「HIV・AIDS」という共通するテーマであるが、趣旨に違いがある。前者ではHIV・AIDSそのものを理解・認識することおよび、静岡市保健所で実施される無料検査の周知に関する活動を趣旨としている。後者である本報告の活動では、若者が陥りやすい問題について啓発することを趣旨としている。当ゼミでは、若者へHIV・AIDSを啓発するためには、まずはHIV・AIDSの周辺にある若者が陥る可能性のある問題について、啓発していく必要性が感じられた。

これらについて啓発活動を行うにあたり、ゼミ内で問題の精査や意見交換を行った。ゼミ内で浮かび上がった疑問や不安・誤認は、ゼミ生と同年代の若者はもちろん、小中高校生の中でも同様に広がっているものだと予想される。当ゼミでは、参考文献の収集や専門家へのインタビューや協力を得て、これらの問題点を解決していこうと考えた。それとともに、早い段階から十分に「HIV・AIDS・薬物・インターネット依存・ゲーム依存など」について知る機会を作ることが必要だと考えた。

本報告の活動では、ごく普通の若者の日常について若者への「HIV・AIDS」の啓発活動の中でも、とりわけ「薬物・インターネット/ゲーム依存」などに関する啓発活動にプライオリティを置いている。啓発品を作成するにあたり、若者から若者（小・中・高校生）へ自らに起こりうる危険について理解・考えてもらうべく若年層にターゲットを絞った内容とした。「遊びの中で知る学び」を創出することを目標とし、「啓発かるた」と「啓発資料」という媒体を選択した。InstagramやTwitterでは、昨年度よりも理解しやすい表現を選び、小学生から使用できる資料の紹介なども盛り込んだ。



図1：先行研究など資料の検討の様子

2. 研究の目的

昨年からの啓発活動の中でHIV・AIDSだけを取り上げても効果は頭打ちであり、隣接する問題についても合わせて啓発していく必要があると考えた。静岡市をはじめ、日本の若者の間では「いきなりエイズ」が急増している。エイズは私とは関係ない！異性と性交渉のみだから大丈夫！不特定多数の人と性交渉を持っているわけではないから平気！などと思っているのは大間違いで、自分の交際相手が一人でも、相手に不特定多数の人と性交渉をした経験があれば、自分も間接的に多くの人と接することになるのである。これらの交友関係には薬物問題が絡んでいることもある。また、気軽に見知らぬ人と交流できる現代では、インターネットは便利な反面、非常に恐ろしい面を持っている。知らぬうちに犯罪行為に加担していた、違法なものを購入していたなど取り返しのつかない事態になる可能性もある。

このようなことに無知であると、自分の将来を自らの手で閉ざしていくというバッドサイクルにはまっていくことになる。これらについて小・中・高校生のうちに認識し、健全な将来を歩んでいけるよう啓発活動を行うことを目的とした。

3. 研究の内容

指導教員が小学校・中学校・高等学校に勤務する保健・衛生や性教育に関する科目を担当する教師各10名に、「どれだけの時間をHIV・AIDS・性教育に充てているか」「HIV・AIDS・性教育を担当する当事者としてどのよう



図2: 学園祭(楓祭)で実施した啓発ブースの前でのゼミ集合写真

なことを心掛けているか」について、2018年8月22日の13時から、ご協力いただいた高等学校の教師が勤務する千葉県内の教室を借り、60分の意見交換会を実施した。そうしたところ、「HIV・AIDSに関する教育」を1時間以上じっくりと時間をかけて行っている教育機関は一校もなかった。高等学校の一校だけ、30分程度のドキュメンタリー番組を見せて終了したというところがあった。また、学校自体が、それらの話題を避ける風潮があり、AIDS教育も性教育も教科書の文章を数行読んで終わりにしているという全員一致の見解を示した。さらに当事者の意見として「気まずい」「恥ずかしい」「質問されたら困る」「生徒には刺激が強いため、何となく大人になるにつれて分かればいいのか」などのマイナス要素ともとれる意識を持っていることが分かった。

そこで、教師や家庭で扱いやすく、さらに生徒が「遊びの中で知る学び」となるよう、以下の啓発活動を実施した。

<啓発かるたの作成>

- 小学生、中学生、高校生などの若者達が遊びを通じて学べるよう、簡潔・明瞭・呼びかけを意識した文言とした。
- 完成した啓発かるたは「ふじのくに地域・大学コンソーシアム」と関連のある機関に配布することを目標とした。
- 使用者が小学生～高校生であることを考慮し、過激な描写や文言は避け、表現については熟考した。
- 商品としての価値と見栄えおよび親近感を得てもらえるよう、かるたのイラストは研究室作成のものイラストレーターへ依頼したものを織り交ぜた。
→192のイラストを作成したが、指導教員・ゼミ生の交友関係や家族を通じて、好まれる絵柄を選抜し、80のイラストを採用した。
- このかるたは、「静岡県」の「ふじのくに」発信であることを意識したデザインとした。

<学園祭(楓祭)等でのイベント>

①体験コーナーの設置

2018年：個室でじっくりと向き合う時間を想定したバスボムづくりを実施

2019年：薬剤師へのインタビューを通じて学んだ、細菌・ウイルスの予防を想定し、石鹸づくりを実施

②掲示物の作成と展示

いじめ・薬物依存・ネット依存の掲示物と配布資料の作成、参考文献の展示を実施

→薬物の種類・いじめとは?・いじめやネット依存をテーマにした映画や小説の紹介

③募金活動

収益金はエイズ予防財団・Act Against AIDS(若者への保健教育支援に関する項目)へ寄付

→1円玉募金を目指し、募金してくれた方には当ゼミ作成のオリジナルメモ帳やゼミ生が作った石鹸をプレゼントした。

※①～③は一体型とし、来場者自身も啓発活動に参加できるような形態とした。

<啓発品の配布・募金活動>

1：協働している静岡市保健所の方々とともに毎年12/1の世界エイズデー前に学内啓発活動を実施

→静岡市保健所が用意した「HIV・AIDSや性感染症に対する無料検査の案内」「女性向けの子宮頸がん検診のすすめ」のほか、2019年度は「令和元年度ゼミ学生等地域貢献推進事業」助成を受けて、「望まない妊娠」「生活習慣病～ネット依存～」「あなたにダイエットは本当に必要か？」の資料も折り込んだ。

2：オープンキャン

パスや各地の大学

紹介の際にも実施

3：昨年度、静岡県

立大学と共同作成

したトイレット

ペーパー設置のそ

ばに、インスタグ

ラム・ツイッター

への誘導ポスター

を設置

4：インスタグラ

ム・ツイッターで

の情報発信

→いじめとHIV・AIDS

の問題に関する事

例を身近な問題と

して捉えてもらう

ために発信・資料

配布

→「麻薬・覚せい剤・

危険ドラッグの定義

」「薬物乱用とは

」「薬物の種類」などを発信・資料配布



図3：学内啓発活動と募金活動の様子

※薬剤師・専門研究機関・各依存支援団体などに指導と協力を得ながら、情報発信と資料作成を行った。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

「啓発かるた」の作成

当ゼミは日本語学研究室である。HIV・AIDS・薬物・インターネット依存・ゲーム依存に関する情報を端的にわかりやすく読み札にし、遊びの中で学びが生まれる「かるた」を作成する。その中には静岡の方言を盛り込み、地域愛も合わせて持ってもらうことも目的とする。

SNSを媒体としてHIV・AIDS・薬物・インターネット依存・ゲーム依存に関する情報を発信

先行研究や最新情報を毎週検討する。指導教員の予備調査同様、ゼミ生は、中高での上記に関する教育状況を把握するため、母校や恩師を通じて教育状況等を調査する。さらに本学の留学生に対し、母国での教育状況について聞き取り調査を行う。指導教員は、薬剤師・医師など昨年度同様に指導を仰ぎ、資料提供や若者に向けてメッセージを送っていただくなど願います。これらについて、学生目線で発信する。情報発信日は基本的には火曜日と金曜日の週二回。周知が必要な情報に関しては週一回とし閲覧者の目に触れる時間を長くする。

オープンキャンパス・学園祭などでの啓発活動

本学に来校する方々に対し、HIV・AIDS・薬物・インターネット依存・ゲーム依存に関することを考える機会を提供するために、手作り啓発品と情報チラシを配布する。その際、受け取ってもらえる形態を考える。



図4：石鹸づくりの試作

(2) 実際の内容 (A: 予定どおり、むしろそれ以上)

計画に沿って、かるたの作成やSNSでの発信、オープンキャンパスで活動を行うことができた。しかし、その活動の中で、学んだ情報を集約した資料を当ゼミが作成することが望ましいのではないかと考え始め、今回のメインとなる「啓発かるた」に同梱する形で、いじめやインターネット依存に関するオリジナル啓発資料も作成した。また、この活動を認めてくださる方々があり、インターネット依存を考える団体「エンジェルアイズ」、インターネット・ゲーム依存を研究する「一般社団法人日本教育情報化振興会」、埼玉県三郷市だるま薬局の江口倫広薬剤師をはじめとするスタッフの皆様、Act Against AIDS等にも参加し、啓発活動にご理解を示してくださったイラストレーターの方々、厚生労働省などに使用の提供やお力添えをいただいた。

(3) 実績・成果と課題

啓発品の配布状況は以下のとおりである。

Instagramやツイッターに誘導するポスター：本学校内100か所

HIV・AIDS・薬物・ネット依存・ゲーム依存に関する資料：1200セット

オリジナル石鹸付き啓発資料：500セット

静岡市保健所提供のエイズデー啓発品＋当ゼミオリジナル啓発資料：500セット

「啓発かるた」＋当ゼミオリジナル啓発資料セット＋専門機関資料セット：100セット

1月20日までのSNSへの投稿記事：100投稿（2020年3月末日まで継続予定）

上記が実績と成果である。

しかし、これまで多くの啓発品を配布してきたが、配布後、果たしてこの教材を有効に活用してくれるだろうか。



図5: 完成した「啓発かるた」と資料

(4) 今後の改善点や対策

今回は配布にあたり、ふじのくにコンソーシアム加盟の自治体に絞って配布・送付を行う。当ゼミの力と助成金だけでは静岡県内さらには全国の教育機関へ配布することができなかった。また、Instagramやツイッターについてもフォロー数や閲覧数が伸び悩んでいる。これらを解決するためにはどのような策をとるべきか検討すべき課題が残った。

5. 地域への提言

当ゼミがこれまでの活動を通して強く感じたことは、教育機関のトップや教職員の考え方に誤りがあることである。本学でも同様の壁が立ちはだかり、活動自体も阻害されることがあった。それは、「HIV・AIDSは生徒にとって刺激が強すぎる」「保健所配布の中高校生向けの資料だからといってあえて見せるべきではない」「不快に思う生徒もいる」という大人たちの偏見である。当ゼミが教育実習に出向いた学生を通じて静岡県（37名）・東京都（56名）の中学生にアンケートをとったところ、「むしろ知りたい」「授業でじっくりやってほしい」に類する回答が82名、「どちらでもいい」に類するものが6名、その他「興奮しそう」2名、無回答3名という結果であった。また、保護者は教育機関に教育を委ね、教育機関は家庭に教育を委ねているという先行研究結果も多く出ている。教育者となる教育機関の判断で生徒の知る権利を奪っている可能性があり、デリケートな問題の押し付け合戦が、若者たちの誤認やネット上に広がる情報の不正確の蔓延、情報の取捨選択能力を低下させているのではないだろうか。

6. 地域からの評価

「令和元年度 ゼミ学生等地域貢献推進事業」の助成金を用い、「啓発かるた」をメインに作成した。「2019年度しずおか中部地域課題解決事業」の助成金では「HIV・AIDSの調べ学習キット」を作成した。いずれも教育機関や各家庭で用いられることを願う。本学ホームページをはじめ、情報発信機関、ご協力いただいた関係機関のお力をさらにお借りして、当ゼミの活動をPRし、話題として取り上げていただくことを希望する。

この活動はこれをもって終了するが、指導教員およびゼミ生の個人の探求は継続させていく予定である。日本語学研究室市原ゼミが各々の静岡英和学院大学での大学生活をかけて作成した啓発品が世の中で活用されることを願う。